

2003.01

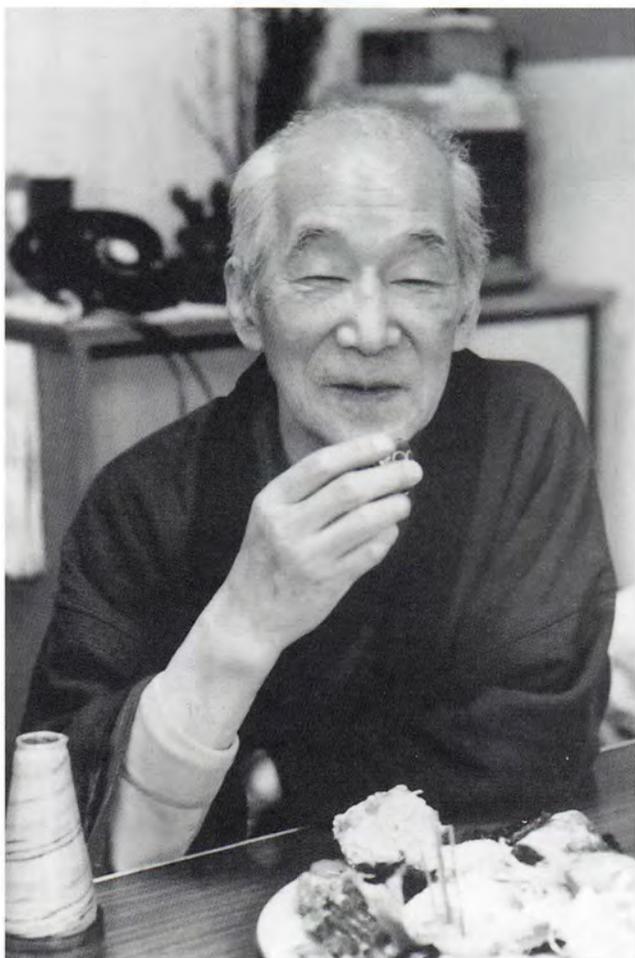
新

歌人群像

筏井嘉一

● 庶民に息づく詩情を探り続けて

● 鈴木諄三 ●



時代と歩み

筏井嘉一いさい けいちは一八九九(明治三十二年)十二月二十八日、富山県高岡市で出生。父は竹の門たけのかど(竹の門)と号した俳人で、短歌、絵画もよくし、大正期の富山俳壇の重鎮であると共に、新傾向俳句の作家として名声を博していたことから、嘉一の文学的素質も父より受け継いだものが大きかったと言えよう。中学三年の頃より北原白秋に心酔し、「地上巡礼」に入会、以後、小学校音楽教師として生計を立てつつ、「曼陀羅」まんたら「ザンボア」ざんぼあ「秦皮」あまのこ「日光」と白秋に従い、一九二七(昭和二年)「香蘭」こうらんの選者となるが、翌年「新興歌人連盟」結成に参加し短歌革命に身を投じるようになる。一九三〇(同五)年、短命に終わった同連盟解散の後、新芸術派短歌運動を提唱し「エスプリ」を創刊、うつむきてわれのあゆむを気づきしがつひにうつむき街をゆきけり

竟つひのものをおしつめゆきて恐ろしき我のほかなるなものも観みず

などの作品を発表。歌壇に新風を巻き起こし、筏井短歌の前期のピークを確立するが、以降、長期にわたる沈黙の期間を迎え作歌より遠ざ

かることになる。

一九三八（昭和十三）年、五島茂、美代子夫妻が「立春」を創刊したことにより客員として作歌を復活、そのめざましい作歌活動により、三九年「利玄賞」、四〇年「大日本歌人協会賞」を受賞。同年五月、合同歌集「新風十人」、次いで第一歌集「荒栲」を上梓し、そうしためざましい活動が、当時の若手歌人層を刺激し、「蒼生短歌会」（第一次「創生」）創立といった副産物を生むが、まもなく太平洋戦争による時局逼迫のために中断、終戦までの空白期間を生ずることになる。

戦後、北見志保子と共宰した「定型律」を経て、一九五三（昭和二十八）年「創生」を復刊、以降「創生」により、生涯庶民感情を体した情感を詠み続けて一時代を形成するが、一九七一（昭和四十六）年、七十一歳で永眠。この間に郷里の高岡市古城公園の一隅に、

ゆめさめてさめたるゆめは恋はねども
春荒寥とわがいのちあり

の歌碑が父竹の門の句碑と並立している。

『荒栲』に込めた意志

篠井嘉一は、生涯二冊しか個人歌集を持た

なかったが、それぞれの歌集により世の注目を集めることになった。

第一歌集『荒栲』には、「香蘭」以降一四〇（昭和十五）年までの作品が逆年順に配されており、五章五百首という厳選された歌が収められている。

ゴオガン
Causun はタヒチの島に遁れけり真実
たづねてつひに孤なりき

おもひきり猫のあたまをぶつたたきす
べなくてわれは坐りけらしも

情欲のほのほあらはに身にいでてあひ
遂ぐるまぞいのちなりける

初期の部類に入ろうした作品は、「新興歌人連盟」を経て「エスプリ」の新芸術派運動の期間になされたものであり、その特異な発想による青年期の悲傷が多く、若手歌人の層を引きつけたことは記憶に鮮しい。

夢さめてさめたる夢は恋はねども春荒
寥とわがいのちあり

わが冬はさむきこころの糧としも太陽
ひとつ恋しかりけり

やや抽象的に吐露されたこれらの心情は、過ぎ去ってゆく青春に向けた感傷でもあろうか。そして、それは時代と共にひたひたと無



深川の家の前で、長女の真弓、次女の千種といっしょの篠井嘉一

音のうちに押し寄せてくる緊張感の漲った世情への敏感な戦きともとれよう。篠井は、こ

うした心の翳りを、
過勞つぎてくたくた眠るうつし身や情
痴の夢のただ狂ほしく

寒夜には子を抱きすくめ寝ぬるわれ森
の獸といづれかなしき

と、やや具体化した表現方式でも多く詠み分けている。やがてこうした具象を体した表現が「庶民のこゑを、ありきたりの言葉で素直に表現してゆきたい」（『現代短歌全集』）とした以降の作品のスタイルに移行してゆくのである。

『荒栲』の声を高めたもう一本の柱として、社会の暗部に眼を向けた次のような一連がある。

筏井嘉一

『籬雨莊雜歌』が日本歌人クラブ推薦歌集賞を受賞。贈呈式での筏井嘉一（1966年）



かつがつも軍事扶助料に家族生き子が
病めば子のたちまち死にき
塵埃の路次に燻ぶりそだつ子ら連れて
来し野の広さに疎む
ある親は子にも盗らせ生きにけり盗
む手口の冴えつつぞ子は
世は踊り一家ささふる女生徒の授業う
とと居睡りて過ぐ
ある親もまた食ひかねてをとめさへま
だ覚めぬ子の身を鬻がしむ
欠食児の父戦死すと報れり一年生に
て事わきまへず
夜の街に身を鬻ぐなる娼婦らの墜ちは
てて澄む眸を見にけり

そしてこれらの歌の展開として、

今日おくり征かす兵士たたかひていく
ばく還るこの道をまた
征き際に子をかへりみし老兵の魂刺す
ひとみ衆を泣かしむ
支那民衆落ちゆく写真ぜひもなく敵と
見ながら子のあはれなり

小学校教師の目から見た日中戦争時の底辺
社会の実態が生々しくこれらの作品には疼い
ていよう。言論統制の厳しい非常時化が国中
を覆っていた時代であり、一歩間違えば拘束
される懼れもあるこうした社会実態の提示は、
ひとえに勇氣のある行動として多くの人々に
受け入れられ、その訴えるものの強さに目を
醒らされたのであった。当然、こうした勇氣
ある作品に対して歌壇よりの称賛の声は高く、
筏井の社会派歌人としての名を否応もなく高
めたのである。

しかし、こうした風潮は筏井にとって決し
て本意ではなかった。筏井の詠うこれらの作
品に込められた想いは、思想的な信念から生
じた詠風ではなく、多くの人々が意識してい
た厳しい社会の現実が、自己を取り巻く実態
としてとらえられ、そこに注がれた愛情の眼

に裏打ちされた、情感のほとばしりとして生
み出されたものであった。常に身をもって体
験した現実より体得したものを自己の内実と
の共鳴により詩化し、いかに生の悲傷に響か
せてゆくかに総てをかけて詠み上げているの
である。それだけに素材対象の範囲の狭さが
折に触れて言われているが、横への拡がりよ
りも、本質の掘り下げによる縦への深度が、
筏井作品の生命であることを知らなければな
らない。

晩年の自在『籬雨莊雜歌』

第二歌集『籬雨莊雜歌』は、一九四五（昭
和二十）年八月（四十五歳）より六五（同四
十）年六月（六十五歳）までの作品のうち四
百十八首を選んで六五年に刊行され、翌年の
日本歌人クラブ推薦歌集賞を受賞した。『籬
雨莊雜歌』に、

若き日は奇を衒ひにき平凡をこよなし
とする齢のおちつき

と詠んでいることから分かるように、前・
中期の、特異性の匂うっていた作品とは異なり、
老境の日常に焦点を当てた心情が多く内省に
傾きつつ詠み込まれている。

高岡市古城公園で、とみ夫人と。向かって右は筏井嘉一の歌碑、左は父親の句碑（1965年）



国敗れすでに十年の歳月の大き息つく
生きのびしかば

いくほどの余命あるらむそれはさてよ
い天氣なり元日・二日・三日

幸福はどこかそこらにあるやうで探し
もあてず髪白くなる

とした、反省も込めつつ自適の晩年を詠み継
いでいる作品に加えて、

口小言うるさく妻は老いにけりどこ吹
く風とわれも老いにき

鬼婆と異名をとりし家妻がをりをり笑
ふ腹をかかへて

と妻を詠い、

歌反古にこぼせし酒の濡れあとのとり
とめもなきわがものおもひ

酒をのむ功德いかにと言ふは誰酒のめ
ば血のめぐりよくなる

と酒を愛し、

きさらぎに入りての雪のしづかにてい
かにと見ればなほ降りしきる

パンジーの濃き紫の花むらがり寒きな
がらにわが部屋の春

と自然に親しみつつも、ふと感懐の中に、

人の死を悼むともなくまた一つ結末つ
きし息ほつと吐く

春冷えのころもとなきあけくれに今
年もいくつ聴かさるる計か

と、死を意識のなかに呼び込みはじめている
歌に出逢うようになる。

こうした自然の流れの中に身を任せている
ような心境を詠み継いでいる晩年でも、その
作品を支える一本の芯は、時代に関わらず、

現実のなかから自己に語りかけてくる対象を
とらえ、そこより得た感動を孤に即した嘆き
として普遍的な詠嘆に繋げてゆくといった認
識において不変であった。そして、このよう
な経過を辿り続けてきた筏井嘉一の短歌は、
より繊細な感受性と、自在に飛翔する詩性に
よって、常に斬新な抒情のなかに息づいてき
たのである。

生涯二冊しか個人歌集を持たず、寡作の上
に更に厳しく自作を絞り込み、その性癖であ
る中断の期間を幾たびか持ちながらも、なお
歌壇でその作品の評価が高かった筏井の理念
は、

十首作つたら一首生かして九首を捨てる、
百首作つたら十首生かして九十首を捨てる
いや九九首を捨てて最後の一首を生かす
この心掛けが歌人たらしめる。

まことに自作を捨て得る人であつてこそ、
はじめて自作を生かし得る。
捨てることの修業は、
作ることより一層困難です。

自作をまことに捨てられるようになれば、
歌人と言えよう。

とした、筏井の言葉からも感じとれよう。

（すずき・じゅんぞう「白南風」発行人）